

っていないのであるから、この記述を完了させるためには、第7章においてハドレー循環を語るために軸対象モデル (Held and Hou モデル) を用いたのと同様に、傾圧不安定を含んだモデル、すなわち、いわゆる GCM で得られた解の振舞いについての分類が十分になされている必要がある。しかし、GCM が大気循環を理解しようという力学屋さんの手に広まりはじめたのは最近のことであり、今だ言語の発達は十分ではない。第14章が曲がりなりにも完結するのは当分先のことになるであろう。

以上のような構成から理解されるとおり、本書は大循環を理解するという思想に貫かれて書かれている大循環論の入門書なのである。種々の現象から始まる流体力学的な解釈の入門 (力学の文法入門) 書では、どちらかという、ない。大気物理の各面で登場する流体力学過程のガイド/リファレンスとしてはあまり使えないと思われる。実際、本書には項目索引がない。本書でおこなわれている数々の式の導出、解の振舞いに関する考察、そ

れらを用いた論述などは、あくまでも初心者入門用のものであり (それだけに直観的で示唆に富むが)、気象力学の現場の使用に耐えるものではない、その代わりに引用文献 and/or 参考文献リストはきちんと付けられていて、きっちりと理解したくなったときには元論文にあたることができる。あくまで入門書に徹しているのが本書である。

なお、本書の日本語版は瓜生道也氏によって翻訳出版されるはずなのであったが (Lindzen 氏談)、残念ながら瓜生先生は故人となられてしまった、どなたか遺志を引き継がれませんか?

(東京大学理学部地球惑星物理学教室 林 祥介)

〔編集委員会より:「本だな」欄への自主的な投稿を歓迎いたします。これまでは「天気」編集委員会に書評依頼のあった本を主として載せてきました。今回は、編集委員会として紹介すべき本として、Lindzen 氏のこの本を上げ、編集委員会から林祥介氏にお願いして書評を書いていただきました。〕

### 日本気象学会および関連学会行事予定

行 事 名	開 催 年 月 日	主 催 団 体 等	場 所	備 考
第20回測地学・地球物理学連合総会	1991年8月11日 ～24日	IUGG	ウィーン	Vol. 36, No. 12
第8回エアロゾル科学技術研究討論会	1991年8月21日 ～23日	エアロゾル研究協議会	総評会館 (東京)	Vol. 38, No. 3
HEIFE (地空相互作用に関する日中共同研究) ワークショップ	1991年9月22日 ～28日		中国 (蘭州)	Vol. 38 No. 1
『小氷期の気候』国際シンポジウム	1991年9月25日 ～28日	日本地理学会古気候復元研究グループ	八王子 (東京都立大学)	Vol. 37, No. 8
日本海洋学会創立50周年記念大会	1991年10月14日 ～19日	日本海洋学会	カンダパンセ (東京)	
日本気象学会平成3年度秋季大会	1991年10月23日 ～25日	日本気象学会	名古屋国際会議場	Vol. 38, No. 5
Quardrennial Ozone Symposium	1992年6月4日 ～13日	IAMAP/IOC	アメリカ Virginia 大学	
第11回雲と降水に関する国際会議	1992年8月17日 ～21日	IAMAP/ICCP	カナダモントリオール McGill 大学	Vol. 38, No. 4
第13回ニュートリオンと大気エアロゾルに関する国際会議	1992年8月24日 ～28日	IAMAP, CNA, ICAP	アメリカユタ州ユタ大学	Vol. 38, No. 1